

年間第十七主日

2017.7.30

マタイ 13・44-52

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

この7月の主日ごとに、マタイ福音書を通して響くイエスのおことばにあらためて耳を傾けてきました。7月10日の年間第15主日から、今日の年間第17主日までの3回の主日にわたって、わたしたちは、マタイ福音書の13章にまとめられている、イエスが語られた天の国のたとえ話を、通して聴いてきたこととなります。あらためて振り返ってみると、マタイ13章の天の国のたとえ話は全部で七つありました。種を蒔く人のたとえ、あるいは、蒔かれた種のたとえ、毒麦のたとえ、からし種とパン種のたとえ、そして今日聴いた、三つのたとえです。

これらのたとえ話の間には、天の国のことを語るために、何故イエスはたとえ話を用いられるのかということが述べられていました。たとえ話が何を語ろうとしているのか知ろうとすれば、最終的にはそのたとえ話を語られたイエスに聴いて見なければなりません。イエスの後について行って、イエスもとに留まって、たとえの意味をイエスに尋ねた弟子たちのように、わたしたちも今日また新たに、イエスの教えに耳を傾けたいと思います。イエスはそのような弟子たちを求めて、これらのたとえ話を語られたのです。

イエスがこれらのたとえ話を語り始められた場面をあらためて思い起こしてみると必要があります。イエスは湖の舟の上からこれらのことを語られ、人々は岸辺のこちら側にいてイエスの語られるたとえ話を聞いていたのです。「何故あの人たちにはたとえを用いてお話になるのですか」と尋ねた弟子たちに対するイエスの応えは、わたしたちには衝撃的なものであるはずで、「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちには許されていないからである。持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる、だから彼らにはたとえで話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである」。このような厳しいおことばをもってイエスは何を言おうとしておられるのでしょうか。イエスが語られたことを理解するためには、こちら側の岸辺にいたままではいけないのです。弟子たちのようにイエスがおられる舟に乗って、イエスが行かれるところにつき従い、イエスがたとえで語られたことの意味を教えていただこうとしなければならないのです。イエスはそのような弟子たちを待っておられるの

です。イエスはわたしたちをご自分のもとへ招くために、これらのたとえ話を語っておられるのです。

イエスの招きに応じて、イエスが語られたたとえ話を理解しようと望むなら、安易にその意味を知ろうとする前に、何度も何度もイエスが語られたことを心のうちに思い返さなければなりません。それが聴くということだからです。そして、イエスが求めておられることはまさにそのようなことだからです。イエスが求めておられるのは、そのようにイエスのもとにとどまって、イエスに聴き続ける弟子たちだからです。

マタイ 13 章の一連のたとえ話を語られたイエスはその中に大きなヒントも与えてくださっています。それは、「天の国は次のようにたとえられる」というおことばです。イエスはこれらのたとえ話によって天の国について語ろうとしておられるのです。イエスの語られたことを心に留めるためには、わたしたちもイエスが語ろうとしておられる天の国について興味を持たなければなりません。イエスが語ろうとしておられる天の国とはどのようなものであるのか、知りたいと思えなければなりません。この思いがあるかないかが、わたしたちを湖のこちら側に留まらせるか、弟子たちのようにイエスの後に従わせるかの分かれ道です。今日のイエスのお話に沿って考えるなら、宝の隠されている畑を自分のもとにするために、あるいは見つけた高価の真珠を買うために、手持ちの財産を投げ出せるかどうか踏ん切りどころです。イエスの語られる天の国のたとえ話は、そのような意味でも、わたしたちへの招きのおことばです。イエスはわたしたちをイエスが語ろうとしておられる天の国へと招くためにこれらのたとえ話を語っておられるのです。

先週もお話したように、イエスがこれらのたとえ話で語ろうとしておられ天の国とは、イエスが天の御父のもとからこのわたしたちの世界のもたらそうとしておられる天の国です。マタイ福音書は、イエスの宣教活動の始めに響いた、「悔い改めよ、天の国は近づいた」というイエスの宣言を印象深く記しています。わたしたちがこの 3 週間の主日ごとに聴いてきた天の国のたとえ話は、その天の国の福音を語っているのです。

イエスが語られる天の国は、この地上に生きるわたしたちの中に、イエスがもたらそうとしておられる天の国です。イエスは天の国をわたしたちにもたらすために、わたしたちの中に来てくださったお方です。イエスのおられるところ、イエスが天の国を指し示してくださっているところに、天の国は開かれているのです。そのような天の国についてイエスは、わたしたちが聴いてきた天の国のたとえ話を語り聞かせてくださったのです。そのことが分かるためには、イエスを信じて、イエスの弟子になるしかありません。イエスの語られることを聞いても、湖のこちら側に留まったままではならないのです。こちら側

に留まったままではイエスが示しておられる、わたしたちにとっての天の国の貴重さとおおらかな広がりを決して理解することは出来ないのです。

今日の福音の終わりに、天の国について語り終えられたイエスは、「あなたがたは、これらのことがみな分かったか」とお尋ねになっておられます。その問いに対して弟子たちは「はい、分かりました」と無邪気に応えています。その弟子たちに、イエスはさらに続けて、「だから天の国のことを学んだ学者はみな、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」と言われています。学者とは文字通り学ぶ者ということです。イエスから聞いたことを、イエスのもとで絶えず新たに学ぶことによって、天の国は一層わたしたちに近づき、わたしたちはその中に生きていることが分かってくるのです。

今日聴いた最後の魚を集める網のたとえは、ガリラヤの漁師であった最初の弟子たちにイエスが呼びかけられたおことばを思い起こさせます。「わたしはあなたがたを人間を取る漁師にする」。最初の弟子たちから始まった教会の宣教の中で、この地上の日々の生活を生きるわたしたちもまた、イエスを信じる者たちとされ、神ご自身が最終的な決着を下される、イエスの語られた天の国の大いなる広がりの中に招き入れられたのです。

最後に、この七月の最初の主日、七月三日の年間第十四主日に聴いたイエスのおことばを思い起こしたいと思います。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。これは御心に適うことでした」。ここに、天の国の喜びが語られています。天の国について語り終えたイエスが「あなたがたはこれらのことがみな分かったか」と尋ねられた時、「はい、分かりました」と弟子たちは応えたのでした。その弟子たちを前にして、イエスはこの御父への喜びの報告をしておられるのです。

わたしたちのもとに天の国をもたらしてくださったイエスと、その実りを喜ばれる御父の喜びの中に、イエスを信じる者とされ、イエスの弟子たちとされたわたしたちの天の国は広がっているのです。このことを、本当に悟らせていただきたいと思います。それを悟ることができるとき、わたしたちはイエスのもとで真の安らぎを経験することができることでしょうか。「重荷を負う者、疲れた者はわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるイエスのおことばに心底信頼を寄せることができることでしょうか。そのような恵みを願って、そのような恵みに感謝して、今日のミサをおささげしたいと思います。